

第4群（活動報告）

精神保健医療福祉版の地域包括ケアの取り組み  
ーケースレビューから事業化までの取り組みと連携パス等作成によるその成果ー

○北部保健福祉事務所(大崎保健所) 技師 篠原真夏美  
高橋みね, 三浦詩織

キーワード: 地域課題の明確化と共有, 連携パス, 関係機関との協同による取り組み

I はじめに

当管内の精神保健福祉法に基づく通報等件数はH25年度42件であり、通常の精神保健活動が実践しづらい状況にあった。早期介入による予防的な取り組みを行うため、今回、精神障害者の支援上の課題整理、関係機関との共有・解決策の検討を行った結果、精神保健福祉活動の円滑な連携を図ることで、精神障害者が地域の中でその人らしい生活を送ることを支援することが方向づけられたので、そのプロセスと成果について報告する。

II 方法

H26年度所内、市町とのケースレビューを通して、個別事例に共通した支援上の課題を整理し、市町担当者会議で地域課題の整理と対策を検討し、精神保健医療福祉関係機関連携会議で、連携パス、退院支援ポスター、管内社会資源集を作成することが合意された。それらを作成するため、H27年度精神障害者地域移行支援事業で、医療・保健・福祉の関係機関で構成する地域支援会議を開催し、事業の全体像を示し、了解を得て、その下部会議であるワーキングで具体的に検討した。現場の声を十分に反映できるように管内精神科病院CW、市町保健師、基幹型相談支援センター職員の出席を求め、完成後は関係機関に周知した。

III 活動内容

ケースレビューで把握された支援上の課題から、市町担当者会議で「サービス量の不足とミスマッチ」「サービス内容の不足やミスマッチ」「関係機関同士の連携不足」「住民の啓発の必要性」を地域課題として整理し、関係者で連携する共通のルールや住民啓発の方法を作成する必要があることを確認した。(表1) ワーキングで連携パス等の内容を具体的に検討するなかで、お互いに連携について考えの違いがあることを認識し、最低限連携が必要な事例について整理し、支援上の問題を感じた担当者から発信することを確認し、それらを共通認識とするためのツールとして、連携パスを作成した。H28年度の精神障害者地域移行支援事業で連携パスの活用状況を確認した結果、ケア会議で課題の共有のために活用した、各担当事例の連携状況を反省する場面で活用したという成果も見られる一方で、まだ連携の取り方が手探り状態、連携したい事例ほど家族の理解が得られないという意見も挙げられた。

<b>サービス量の不足やミスマッチ</b> 解決策: 情報や目的の共有 例)・事例を中心とした連携 ・保健所主催の会議 ・各市町自立支援協議会の活用	<b>サービス内容の不足やミスマッチ</b> 解決策: 人材育成、支援力向上 例)・ケースワークを通じた支援力の向上 ・研修による人材育成 ・ケースレビューによる対応策の検討
<b>関係機関同士の連携不足</b> 解決策: 連携の強化 例)・地域移行の周知 ・関係者が共通して活用できる連携パスの作成	<b>住民への啓発</b> 解決策: 啓発 例)・住民向け啓発広報等

表1 市町との担当者会議で検討した地域課題と解決策

IV 考察

ケースレビュー→担当者会議→精神保健医療福祉関係機関連携会議という段階的な課題の見える化が、地域の特徴を踏まえた対策の明確化につながったと考える。連携のための共通のルールづくりなど、この地域に必要な取り組みを確認しながら、保健所が取り組むべきことを確認できたことは、次年度事業の活動を検討する上でも有効であった。そして、実務者が連携パス等作成に取り組んだことで、連携して支援すべき事例の明確化、協同で支援する意識の向上、現場で連携パスを活用する動機づけ、関係者の相互理解を深めることにつながったと考えられた。関係機関の了解を得て組織的に取り組んだことや、管内の精神科病院が地域移行の取り組みに理解と関心を示したことが、精神障害者の地域移行支援体制が推進された要因となったと考えられた。

V おわりに

精神障害者への切れ目ない支援を行っていくために、今後、関係機関と連携のための共通認識を更に深めることや、支援に乗らない方へのアプローチ方法を検討していくことが必要である。加えて、課題整理→課題の共有・対策の検討→課題解決に向けた取り組みを、関係機関と協同で取り組んでいくことと、継続的に積み重ねていくことが、精神保健医療福祉版の地域包括ケアにつながっていくと考えられ、今後必要な活動として示唆された。